

未来のブカツのために

～部活動の地域展開の 取り組みとこれから～

150年に一度の教育大改革 公教育の限界か、共創の未来か

日本は今、中学校の部活動改革を端緒とした、150年に一度といわれる公教育の大改革の真つただ中にあります。

2018年にスポーツ庁が策定した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を起点とする部活動改革は、21年10月「運動部活動の地域移行に関する検討会議」から議論が本格化しました。スポーツ庁と文化庁による実行会議は25年5月に最終取りまとめを公表し、改革は決定的な局面を迎えました。その内容は、従来の「地域移行」を「地域展開」へと名称変更し、26年度から6年間で「改革実行期間」と定めるものです。これは、31年度までに、休日の部活動の原則全てを地域へと展開するという、具体的かつ待ったなしの動きです。

25年6月には、公立中学校の部活動の地域展開の推進に向けて、国や自治体の責務を明記した改正スポーツ基本法が成立しました。これは地域展開の推進体制を強化するものです。

この改革は、単なる教員の働き方改革ではありません。長らく教員の献身に依存してきた「教育課程外の

学校教育活動」である部活動が、もはや学校単独では維持できないという状況を社会に突き付けました。部活動というかけがえのない教育の場を失えば、「公教育の崩壊」のトリガーポイントになりかねません。

日本の未来を担う子どもたちの育成という重い社会的責任を果たすため、教員だけでなく、地域社会全体が当事者としてこの課題を受け止め、学校と保護者、地域と連携し、新しい部活動を共創していく必要があります。さらに、公教育の意義を未来へつなぐため、この歴史的な転換点に主体的に向き合うことが、今、強く求められています。

部活動の未来を守るために、 危機感から始まった小さな船出

22年夏、現任教員や元教員7名が立ち上がり、翌年NPO法人部活動リノベクエストLaboが発足しました。中学校や高校、異なる教科の教員という多様な顔ぶれが集まった背景には、迫りくる部活動改革に対して学校の先生方の危機感が薄い現状がありました。だからこそ、想いを同じくする仲間がつながる場の必要性を強く感じたのです。

集まった7人が掲げた共通の願いは明確でした。「全ての生徒たちが

自主的・自発的にスポーツや文化活動を公平に選択できる環境を整えたい。そして、教育・地域・情報の格差に左右されない新しい部活動文化を築こう。さらに、公教育の在り方にも一石を投じる挑戦をしよう」と。

それから3年を経て、挑戦は続いています。部活動の地域展開には、指導者の人材不足、活動場所の確保、財源の問題など多くの課題があります。地域によっては部活動そのものが消滅する可能性すらあるのです。

部活動は、学年を超えた絆や共通の目標に向かって努力する連帯感を育み、教室では得られない貴重な体験の場です。青春の1ページを彩るその価値は、授業や学校行事にも良い影響を与えてきました。決して、現行の部活動が「正解」だと主張するわけではありません。ただ、この文化が失われれば、地域コミュニティの希薄化や学校の形骸化につながりかねません。

現在の改革は、子どもの声が十分に反映されないまま、大人の都合で進められているのが現実です。では、子どもたちにとって本当に価値のある部活動での学びとは何でしょうか。本来、部活動は生徒たちの自発的な活動であり、仲間と協働する学びの場です。大人が「やらせる」もの

NPO法人部活動リノベクエストLabo 副理事長
大阪府立箕面東高等学校 首席 保健体育科

みやもり ようすけ
宮守 陽介

NPO法人部活動リノベクエストLabo 副理事長

S&Cコーチ・スポーツマンシップコーチ

箕面市立中学校在籍生徒の保護者

きたの かずよし

北野 和良

NPO法人部活動リノベクエストLaboは、次世代の若者が自主的・自発的にスポーツ・文化活動をフェアに選択することができ、自己実現に向かって成長できる環境を構築するための支援に関する事業を行い、日本の新たな部活動文化の創出を目指しています。



次世代リーダー養成アカデミー「アントレLabo」のフィジカルプログラム実証の一コマ。「跳ぶ」「走る」「投げる」を3日間に分けて、探究型プログラムを実施。写真はウォーミングアップ時。小学校5、6年生を中心に、小学校3年生から中学校2年生まで参加。(2025年8月開催)

ではなく、生徒たちが「創る」ものであるべきです。今こそ、大人の都合ではなく、生徒主体で進める新しい仕組みづくりが求められています。そこにこそ、部活動改革の本質的なヒントがあるに違いありません。

部活動リノベクエストLaboの 実践とチャレンジ

私たちは、今、大阪府箕面市の府立箕面東高等学校を拠点とした「ミライのブカツ」構想を立ち上げ、進行させています。これは、生徒たちが自ら運営・経営する自治である「本来あるべき部活動の姿」を実現するものです。

「ミライのブカツ」は、既存の用意された選択肢から選ぶのではなく、

自らが「やりたい」と考えるスポーツや文化活動を通じて仲間を集めて創るブカツです。地域の指導者（高校生や大学生を含む）や企業スポンサーを募り、さまざまなステークホルダーから応援・支援され持続可能となります。生徒が主体的にリーダーシップを発揮することが条件ですが、そのための事前の学び場が、私たちが創設する次世代リーダー養成アカデミー「アントレLabo」です。小学校5、6年生を対象としたアカデミーでは「Social Emotional Learning（社会性と感情を育む学び）」を土台とし、第一線で活躍する「ほんまもん」の指導者が提供する「ヒューマン、フィジカル、フード」の探究型プログラムを通じて、新時代を生き抜く力とアントレプレナーシップ（起業家精神）を育み、次世代リーダーに必要なさまざまなコンピテンシーを身につけ、成長していきます。具体的には、創造力・独創力、リーダーシップ、マネジメントスキル、コミュニケーションスキル、問題発見・課題解決能力といった能力を磨きます。

軟式野球のモデル事業に参加された生徒からは、「走り方や投げ方、ストレッチなど基本を学ぶことができた」、保護者の方々からは「身体

の使い方や本質的なことも教えてもらえる」「子どもたちが意見を言える雰囲気を作っていただけののが好印象」など多くのご支持の声をいただいております。この「ミライのブカツ」は、リーダーだけでなく、そこに集まる全ての生徒たちにとってかけがえのない「青春」を謳歌（おうか）する学びの場となります。

地域共創型の持続可能な 教育モデルの構築に向けて

全国では現在（25年12月）、生徒が活動できる機会、場所の確保、指導者の質と量の確保、受益者負担、移動問題など、さまざまな課題が議論されています。もちろんその一つ一つは重要な課題であります。しかし、生徒たちの主体的、自発的な「やりたい」「チャレンジしたい」「愉しみたい」を自分たちで考え、創り出すことができる環境を整えていくことが私たち大人の役割ではないでしょうか？

「ミライのブカツ」構想は、NPO法人部活動リノベクエストLaboをハブとして、小・中学校、高校、大学といった学校と地域社会、企業が連携して成り立つ地域共創型の新しい教育モデルの構築を目指しています。



箕面市地域移行実証モデル事業の指導風景。箕面市内の複数の学校から、小学校6年生～中学校2年生（当時）が軟式野球「箕面ちいきLabo」として参加。場所は、大阪府立箕面東高等学校グラウンド、体育館を活用。一定の受益者負担を設ける実証として実施。(2024年12月～2025年1月開催)

学校は地域と混ざり合い、地域と共に生徒を育む。教育のシェアリングが新しい公教育の姿となると考えています。もちろん、既存の制度や法規、責任に関する課題、教育効果の評価やフィードバックに関する課題などがありますが、今回の部活動地域展開においても取り組むべき課題です。だからこそ、今、教員は教育のプロフェッショナルとして自身も学び成長し、自己実現し、その社会的使命と役割を果たしていくべきです。そして、教員だけでなく、保護者も含めた社会全体が当事者としてこの部活動改革の問題に向き合い、このピンチをチャンスに転換する好機となると願っています。